

中世都市鎌倉における 古瀬戸と輸入陶磁 中世前期の補完関係について

Koseto Ware and Imported Ceramics in the Medieval City of Kamakura:
Complementary Relations in the First Half of the Medieval Period

藤澤良祐

はじめに

①鎌倉遺跡群における搬入状況

②古瀬戸と輸入陶磁の補完関係

おわりに

【論文要旨】

宋・元代の中国産を主体とする輸入陶磁と、中世唯一の国産施釉陶器である古瀬戸が、モデルとコピーの関係にあったことは良く知られているところで、古瀬戸は輸入陶磁の補完的役割を担ったにすぎないとされるが、実態は果たしてそうだったのであろうか。中世前半期の最大の消費遺跡である鎌倉遺跡群において、古瀬戸と輸入陶磁の補完関係を検討したのが本稿である。

これまで鎌倉では数多くの発掘調査が行われているが、比較的良好な遺構面が検出され陶磁器の種類・量が多い四つの遺跡を取り上げ、古瀬戸と輸入陶磁の出土量（廃棄量）を分析したところ、輸入陶磁は13世紀末から14世紀初にかけて廃棄量がピークとなるのに対し、古瀬戸の廃棄量のピークは一時期遅れ鎌倉幕府の崩壊する14世紀前半にあり、その背景として当該期における輸入陶磁の流通量の減少が予想された。また、モデルとコピーの関係にある各器種においても、輸入陶磁の方が廃棄（出現）時期が早いという傾向が認められ、さらに四耳壺・瓶子・水注などのいわゆる威信財では、古瀬戸製品であっても生産年代と廃棄年代との間に半世紀近い伝世期間が想定された。

一方、鎌倉で大量に出土する青磁や白磁の碗・皿類は、当該期の古瀬戸はほとんどコピーしないのに対し、入子・卸皿・柄付片口などの古瀬戸製品は、鎌倉での出土比率が高いにも拘らず輸入陶磁に本歌が確認できないことから、古瀬戸と輸入陶磁の間には一種の“住み分け”が行われていたことも明らかである。すなわち中世前半期の古瀬戸は、輸入陶磁に存在しないもの、あるいは輸入陶磁の流通量の少ないものを重点的に生産しており、両者は戦国期の白磁や染付の皿と瀬戸・美濃大窯製品の皿類にみられるような競合関係にはなく、コピーである古瀬戸製品自体が、モデルである輸入陶磁に匹敵する価値観を有していたと考えられる。